

Title	「神話」と「歴史」：The Rainbow 批評をめぐって
Sub Title	"Myth" and "History" : criticism of The Rainbow
Author	花尻, えりか(Hanajiri, Erika)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1995
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.68, (1995. 5) ,p.98(129)- 116(111)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00680001-0116

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「神話」と「歴史」——*The Rainbow* 批評をめぐって——

花 尻 えりか

D. H. ロレンス (1885-1930) の小説 *The Rainbow* (1915) をめぐっては、この作品を神話としてあるいは歴史として読むかという問題、さらにそれぞれの読みの立脚点を追究することで、作品自体の理解のみならず、ロレンス批評、そして現代の文学批評における展開の重要な一面を認識することができる。文学作品のなかでの神話を下敷きにした過去の意識的な書き換え・創造、そして昨今の文学批評における過去あるいは歴史のとらえ方に関する活発な論議をもちだすまでもなく、神話・歴史・文学は常に不可分の関係にあったといえよう。しかし拙論では、文学作品のとらえ方という問題に限って「神話」「歴史」の二語を定義する。すなわち、小説をいわば神話とみなしてそのなかに永遠・普遍的なテーマを求める読みを「神話批評」、他方、小説に歴史の忠実な反映をみようとする読みを「歴史批評」とし、両者の具体的な方法論の検証を試みる。ロレンスの小説のなかでも *The Rainbow* は、とりわけ両者のあいだで議論が活発な作品であり、その意味で批評に提起する問題も大きい。本稿では、解釈の相違が顕著にみられる作品中の3か所について、双方の批評を対置・比較することでそれぞれの読みの視点を探り、結論部でその意義を考察したい。

I

The Rainbow を神話として、歴史から切り離して読む代表的な批評家には F. R. リーヴィス、そして彼を師と仰ぐ H. M. グレスキがいる。リーヴィスは、*The Rainbow* を “a major work of a great writer”⁽¹⁾ と呼んでその20世紀英文学における重要な地位を確立した。ジェイン・オーステ

イン、ジョージ・エリオット、ヘンリー・ジェイムズ、ジョセフ・コンラッド、そしてロレンスへと至る小説の歴史を、英文学の“the great tradition”として特権的に守り抜こうとするリーヴィスの *The Rainbow* 批評の根底にあるのは、この作品の“the great tradition”への忠実さに対する高い評価である⁽²⁾。歴史的・社会的批評に対するアンチテーゼとして1920年代にうちだされた新批評とは一線を画するものの、道徳と美を作品に求める神話批評において、作品の歴史的意義が深く追究されることはない。神話批評家の関心は、人物像・シンボル・文体などの「非歴史的」要素をテキストから抽出すること、あるいは歴史的要素を時間を超越した神話的・普遍的な要素に変換することにある。

このような神話批評あるいは非歴史的批評は、ロレンス批評のみならず今世紀の英文学批評において絶大なる影響力を誇ってきた、いわゆる伝統的な批評でもある。リーヴィスは著書 *The Common Pursuit* (1952) のなかで、批評家の役割について述べている。彼の提示する批評家の課題は、模範的な読者として、他の読者にテキストに描かれた経験についての考え方ではなく味わい方を示し、その“concrete fullness”⁽³⁾に到達することである。すなわち、テキストに書かれたことの美的・道徳的価値の判断がその批評の到達目標であり、その書かれた背景・理由、そしてテキストに書かれていないことには注意が払われないのである。“maturity”, “seriousness”, “wholeness”, “life”などをその批評のキー・ワードとして、彼の信じる人間存在の本質あるいは絶対的な価値を小説に求め、文学作品の序列化を図る試みであるといえよう。その最高峰に“the great tradition”が君臨することはいうまでもない。

リーヴィスによると、*The Rainbow* を書いたロレンスは、社会史の記録者としてジョージ・エリオットの偉大なる後継者である。そして、その批評のなかでは特に、この小説とエリオットの小説の持つ資質——イングランドの地方生活に息づく健全さ・生命力・豊穣——との密接な関わりが強調される。

That Lawrence was . . . brought up in the environment of a living tradition *The Rainbow* offers the most compelling kind of evidence. . . . (As to whether the tradition qualifies as “central” I will not argue ; I am content with recording it have been that in the environment of which George Eliot, too, was brought up.)⁽⁴⁾

リーヴィスの批評が歴史を完全に無視するものではないことは後述するが、彼の意味する歴史、あるいは“living tradition”とは、産業主義が浸透する以前のイギリスの田舎の生活に見出せるものであり、彼の選んだ少数の小説家の特定の作品に描かれる「生活」なのである。それは、エリオットよりさらに時代の下るロレンスの小説においては、現代機械文明への嫌悪を表明する際に彼が懐古的に描く“old wild England”での「生活」にはかならない⁽⁵⁾。

さて、*The Rainbow* の冒頭部分は、マーシュ農場で代々農業を営むブラウングウェン家の人々を描写したものであるが、メタファーに富んだ美しい詩的な散文として神話批評家の評価が高い。

The Brangwens had lived for generations on the Marsh Farm, in the meadows where the Erewash twisted sluggishly through alder trees, separating Derbyshire from Nottinghamshire. Two miles away, a church-tower stood on a hill, the houses of the little country town climbing assiduously up to it. Whenever one of the Brangwens in the fields lifted his head from his work, he saw the church-tower at Ilkeston in the empty sky. So that as he turned again to the horizontal land, he was aware of something standing above him and beyond him in the distance⁽⁶⁾.

上に引用した冒頭の段落以降数ページにわたって、年代・個人・出来事あるいは物語の筋の特定を拒絶するかのような、一見非常に抽象的な「美し

い」散文が続く。リーヴィスは、“the traditional country life that centres in the Midlands farm”⁽⁷⁾を描写したこの冒頭部分を、“something that is essential to Lawrence’s theme”⁽⁸⁾を確立する箇所として、*The Rainbow*における「ロレンスのテーマ」追究の出発点とする。

冒頭部分で神話批評家の眼に明らかになる「ロレンスのテーマ」は、ブラングウェン家の男たちと女たちの二項対立的な関係である。すなわち、自然と一体化し、農場での自給自足の生活に満足する男たちと、農場の外に広がる未知の世界を志向する女たち——それは、聖書のモチーフの豊富なこの小説にふさわしい、エデンの楽園におけるアダムとイヴの姿に重なる——の対立と、その理想としての両者の融合である。この関係を、三代にわたる同家のそれぞれの男女の対立・結合の原型とみなす点において、グレスキもリーヴィスの批評に異存はない。また神話批評家は、この二項対立をロレンスの哲学的エッセイにおけるテーマ（弁証法的二項対立と融合）と関連づけることによって、彼らのとらえたテーマに対する確信を強めるのである⁽⁹⁾。かくして、この小説における最も重要なテーマを、リーヴィスは次のように述べる。

The oneness of life ; the separateness and irreducible otherness of lives ; the supreme importance of “fulfilment” in the individual, …it is only by way of the most delicate and complex responsive relations with others that the individual can achieve fulfilment.⁽¹⁰⁾

最も繊細で複雑な他人との共鳴関係を得ることによってのみ、人間は自己発現を達成できる。そして“the essential manifestation of life”のためには、おのれの「深遠なる本質（“deepest being”）」に忠実でなければならない——これらのテーマは、*The Rainbow*の冒頭部分と、ロレンスのエッセイより引き出される二項対立というテーマの巧みな混合物であると同時に、歴史を排除あるいは超越するものである。リーヴィスにとって、この小説において重大なのは男女関係であり（“the crucial relations, of course, are

these between man and woman”⁽¹¹⁾), またグレスキにとっては、男女の完全なる融合 (“two in one, complete”⁽¹²⁾) の追究が小説の根底にある「ロレンスのテーマ」である。彼らの批評のなかでは、“fulfilment”, “essential”, “deepest”, “complete” といった言葉が頻出し、それらが神話批評の重んずる “maturity”, “seriousness”, “life” という概念を支えることになるのだ。

The Rainbow は「ブラングウェン家の年代記」と呼ばれることもあるように、三代にわたる同家の人々の生き様を描いた小説であるが、神話批評家は、冒頭部分で示された男と女の姿を、それぞれの代の登場人物の原型としてとらえる。原型の男女と登場人物との関係は、いわば、“the great tradition” と個々の小説との関係である。つまり登場人物たちは、原型の示す二項対立から引き出されるそれぞれの「深遠な本質」への忠実さの度合いによって評価される⁽¹³⁾。彼らの課題は、リーヴィスによると、“self-responsibility and a wider scope, things which entail a freer play and finer civilisation of the age, the finer contemporary human consciousness”⁽¹⁴⁾を獲得することという、理想的であるがゆえに漠然としたものである。“the age”, “contemporary” といった言葉が使われているものの、その根底にあるのは太古の農場生活への憧憬にはかならない。しかも、原型的な自己に忠実であることという登場人物たちの課題は、ブラングウェン家の一代目の生きた19世紀半ばからこの年代記の終わる20世紀初めに至るまで変わらないのである。神話批評家は、この時期の社会の変化の反映を小説にみるのを意識的あるいは無意識的に拒否しているといえるが、それは彼らにとっての小説が、歴史ではなく神話的な不変の価値観を提示すべきものだからである。

“The Cathedral”と題された第7章では、ブラングウェン家の二代目の夫婦ウィルとアナの対立がクライマックスをむかえる。リンカーン大聖堂を訪れた二人は、この大聖堂に対する見方をめぐって口論を始める。大聖堂を遠くに認めるやいなや “There she is” と声を発し、大聖堂の内では喜びに恍惚となるウィルに共感出来ないアナは、「過去の遺物」に反発さえ抱

く。

“There she is”, [Will] said.

The “she” irritated [Anna]. Why “she”? It was “it”. What was the cathedral, a big building, a thing of the past, obsolete, to excite him to such a pitch? . . . (186)

教会建築を崇拜し、大聖堂の内では感激に我を忘れるウィルの姿に嫌悪を感じるアナは、外に広がる世界に思いをはせる。キリスト教の絶対性の象徴である教会にしがみついた男と、その至高性・永遠性を否定する女の対立は、またしてもアダムとイブを彷彿とさせる。大聖堂内でアナの興味をひくのは、ウィルの信仰心をあざ笑うかのように彼らを見下ろす子鬼たち (“imps”) の彫刻である。

They knew quite well, these little imps that retorted on man’s own illusion, that the cathedral was not absolute. . . . “However much there is inside here, there’s a good deal they haven’t got in,” the little faces mocked. . . .

“Oh, look!” cried Anna, “Oh look, how adorable, the faces! Look at her.”

Brangwen [Will] looked unwillingly. This was the voice of the serpent in his Eden. (189)

子鬼を賞賛するアナによってウィルの「絶対」は侮辱され、崩される。彼は勝利の笑みをたたえるアナを尻目に、自己存在の不完全・限界を感じながら苦悩の人生を送ることになるのである。

ケンブリッジ版 *The Rainbow* の巻末の年表によると、ウィルとアナの大聖堂訪問は1883年10月あるいは11月の出来事であるが⁽¹⁵⁾、神話批評家は夫婦の口論を歴史に照らし合わせることなく、小説の冒頭部分で示された

原型の男女の対立の具象とみなす。彼らの関心はあくまでもウィルとアナの結婚の行方であり、夫婦の対立とその理想的結合の実現こそが問題なのだ。“delicacies and subtleties of the whole poetic dramatic debate”を評価するリーヴィスは、この二人の議論を“a conflict in the inner life of the married pair”に還元する。

[T]he defeat or failure on both sides has its significance in a failure of complete “fulfilment” in marriage ; a failure to “create” . . . “a new knowledge of Eternity in the flux of time”. . . for Will and Anna the experience at Lincoln is in large measure defeat.⁽¹⁶⁾

二人の結婚は「失敗」であり、リンカーンでの体験は彼らの「敗北」を示すものであるというのが、この議論に関するリーヴィスの結論である。また、ダレスキもリーヴィスと同様の意見であり、二人の争いを小説に「リズム (“rhythmic movement of the book”⁽¹⁷⁾)」をつけるために必要な一段階とみなして、夫婦の対立の源をやはり原型の二項対立に帰している。要するに、冒頭部分で描かれた男女の姿に判断基準をもとめ、その反復をブラングウェン家の三代の男女にみようとするのである。第二代の夫婦の結婚を「失敗」だと断定し、次なる対立を第三代の男女にみる——それがダレスキのいう「リズム」なのだ。

最後に検討する第11章の主人公はブラングウェン家の三代目、ウィルとアナの娘アーシュラと、その恋人スクレベンスキーである。彼らが戦争と国家について議論を戦わせるくだりであるが、神話批評家にとってはこの議論もまた、個人の自己発現の失敗、あるいは理想の男女関係の不可能性を示すものとなる。アーシュラは戦争軍人である恋人に“Do you like to be a soldier ?” (287) と尋ね、そこから会話が発展する。スクレベンスキーにとって戦争は“the most serious business”であり、彼は国家への忠誠を疑わない。反対に、アーシュラにとって戦争はゲームと大差なく、国家は彼女の存在を決定づけるどころか、多数の人々から成る集合体にすぎない。

“ . . . What would you fight for, really ? ”

“I would fight for the nation.”

“For all that, you aren’t the nation. What would you do for yourself ? ”

“I belong to my nation and must do my duty by the nation.”

“But when it didn’t need your services in particular——when there is no fighting ? What would you do then ? ”

He was irritated.

“I would do what everybody else does.” . . .

“It seems to me,” she answered, “as if you weren’t anybody——as if there weren’t anybody there, where you are. Are you anybody, really ? You seem like nothing to me. ” (289)

この部分に関するリーヴィスの解釈は、一見したところ彼の従来のものとは異なるように思われる。彼の主張によると、第三代の男女は、初代・第二代の夫婦に比べてその生きる世界がより複雑で文化的・哲学的であるがゆえに、純粹に個人的なレベルでその関係を判断されるべきではなく、社会的文脈のなかでおのおのが代弁・象徴するものを見通す必要がある。実際に彼は、最大多数の幸福に対するスクレベンスキーの盲信を「功利主義 (“Benthamism”)」と呼び、当時の社会状況と小説の読みを関連づける一面もみせる⁽¹⁸⁾。しかしながら、それ以上この口論の具体的な歴史的意義を追究することなく、批評の対象は、恋人たちの“essential relation”を明らかにするものとしての知人の結婚式でのダンスの場面へと移る。結局、彼の批評の焦点は終始、恋人たちの「深遠なる本質」に基づく理想的関係の追求にあるのである。

ダレスキは、この口論から恋人としてのスクレベンスキーの完全な失墜を結論づけており、リーヴィスよりも断定的な解釈を与えている。“Skrebensky is even less defined as a man than either Tom or Will:

lacking the rooted stability of the one and the passionate aspiration of the other, he has no real identity.”⁽¹⁹⁾彼もリーヴィスのめざす視点、つまり個人的なレベルと社会的なレベルのバランスのとれた読みには共感を示すものの、彼自身で社会的文脈からのこの場面の読みを提示することはしない。そして先達と同じように、口論に続くダンスの場面における月の象徴の解明に専念するのである。

以上、三つの場面の解釈より明らかになるように、神話批評家は小説 *The Rainbow* を、その冒頭部分に提示されたテーマの枠組みのなかで読んでいる。ブラングウェン家初代から第三代のそれぞれの男女の関係が、原型の示す対立とその理想的結合を踏襲できるのかという問題がその読みの根底にあって最優先される。また、小説中最も重大な関係、すなわち男女の関係を効果的に示唆するものとしてのシンボリズムの解明にも多大な注意が払われる。神話批評家にとって、小説は永遠・普遍のテーマを包含する神話であって、その具体的な歴史的意義を追究する対象ではないのである。

II

神話批評とは対照的に、歴史批評は小説のなかに社会的・歴史的な文脈を読みとろうとするものだが、*The Rainbow* の歴史的意義をめぐっては、歴史批評家のあいだでも意見が一致しない。ホルダネスは、*The Rainbow* がその前作 *Sons and Lovers* (1913) に比べて歴史的状況の反映が希薄で、ゆえにこの小説は現代社会からの逃避の試みであると非難する。

A novel like *The Rainbow*, on the other hand, excludes so much and orders its inclusions in such a way that it ceases to be a realist novel at all; and in doing so (though this is by no means an inevitable conclusion) it ceases to be a historical novel.⁽²⁰⁾

The Rainbow において、歴史の影響力は「いくつかの神話に抽象されており (“abstracted into separated myths”⁽²¹⁾)」小説のなかで具体的な存在

とはなりえていない、というのがホルダネスの見解だ。この批判にみられる彼の批評精神には、ロレンスが *Sons and Lovers* や初期の戯曲において、労働者階級（被支配階級）の実情をその一員として内側から描いた点を高く評価したレイモンド・ウィリアムズの批評姿勢に通じるものがある⁽²²⁾。ホルダネスは、文学作品はそれが現実の社会を反映する度合いに応じて評価されるべきであるという、ジェルジ・ルカーチの唱えた“reflection theory”を完全に支持するわけではないが、小説において“the realist totality”は再現可能であると主張する⁽²³⁾。また彼は、神話批評家が自説を補足するために用いたロレンスのエッセイとこの小説のテーマの類似性に言及し、それこそが“metaphysical dead-end of *The Rainbow*”⁽²⁴⁾の根源だとする。ホルダネスの読みはこの小説の見かけの歴史性（“apparently historical form in a very large and impressive way”⁽²⁵⁾）、そして作者ロレンスは社会史の優れた記録者であるという、前出したリーヴィスの見解に挑戦するものだといえよう。しかしながらホルダネスの「歴史」は、あくまで階級間の闘争・社会の矛盾を意味する限られた概念であり、それ以外の歴史を排除・否定する傾向があることは否めない⁽²⁶⁾。

他方、“*The Rainbow* is an historical novel”⁽²⁷⁾と明言する歴史批評家に、ケンブリッジ版のテキストを編集したキンキード・ウィークスがいる。“If one reads [*The Rainbow*] historically, what seems insignificant detail reveals a chain of implication.”⁽²⁸⁾と主張する彼は、自らこの小説の年表を作成し数々の歴史的解明を成したが、その議論は同時に神話批評的でもある。あるいは、より正確にいうならば、歴史批評から神話批評へと移行している。実際、キンキード・ウィークスは、“movement into history”⁽²⁹⁾がこの小説の重要なテーマだとするが、その批評の結論は神話批評家のものと区別がつかないものになっている。“History, for Lawrence, is only to be finally understood in terms of the timeless deep structure within personal stories, those basic and opposite impulses within all people and relationships : . . .”⁽³⁰⁾要するに、結局彼は小説 *The Rainbow* に「ロレンス」の歴史観の反映をみるのである。しかしそれでも、

彼の小説分析には歴史的文脈重視の姿勢がみられる点で、それを適宜補足しながら、歴史批評として考察してゆくことにする。

ホルダネスの *The Rainbow* 批判の根底には、この小説をブルジョワ社会の産物だとして非難する見方がある。ロレンスは *The Rainbow* において、戦争・産業の機械化・ブルジョワ民主主義といった、18世紀後半から19世紀初頭にかけてのイギリス社会に支配的な価値を弾劾するポーズをとりながら、それらを夢や神話に抽象化しており、結局はブルジョワ社会のイデオロギーに加担しているというのがホルダネスの見解だ。歴史の矛盾・社会的悲劇・イデオロギーの危機は、小説の美学的な形式に調和するように現実から分離されており、それゆえにこの小説が英文学の正典 (canon) としてその地位を確立したのだとする。ホルダネスの歴史批評は、彼の定義する「歴史」の小説への反映のされ方を分析することで、小説のイデオロギーの解明をめざすものである。

ホルダネスがこの小説の第1章に与える評価は否定的で、“the myth of pre-industrial society”⁽³¹⁾を描く冒頭部分は歴史との関連を殆どもたない、と彼は断言する。その批判を要約すると次のようになる。マーシュ農場にはロレンスの故郷イーストウッドが反映されておらず、そこにはいかなる歴史的現実からも孤立したブラングウェン一家という集合体があるのみだ。この冒頭部分はいわば、社会的闘争や緊張関係が不在の、美学的な完全さをそなえた詩 (“poem”) である。時間と空間の概念もなく、内向的な男たちと外を志向する女たちという抽象的な区別があるだけで、具体性をもつものは何もない。このようにホルダネスは、冒頭部分をこの小説における第一の “separated [myth]” として批判し、小説のその後の展開に懐疑的になる。“Clearly, if the original rural society is mythical rather than historical, it cannot possibly contribute to an authentic presentation of historical evolution.”⁽³²⁾ウィルとアナの住む片田舎、そしてアーシュラの目にする工業都市ウィギストンも、ホルダネスには現実性をもたない神話あるいは夢とうつつるのである。

一方、キンキード・ウィークスは第1章を複眼的に読む必要性を主張す

る。第一の視点で歴史の外に位置する原型の男と女をとらえ、第二の視点で当時のイギリス社会が経験つつあった歴史的变化の小説への正確な反映を評価する必要性である。前者が神話批評家のものでもあることは指摘するまでもないが、同時にそれは、この章の外見上の歴史排除のためにホルダネスが受入れざるを得なかった解釈でもある。他方、後者についてキンキード・ウィークスは次のように述べる。

But, for once, I propose to take the other view, and ask how exactly the novel sees the major changes in provincial middle-class life between 1840 and 1905, and in what sense one might make a serious claim for it as “historical” fiction, in those terms.⁽³³⁾

ホルダネスがこの章を歴史を退ける神話だとして非難するのに対して、キンキード・ウィークスは神話的要素をみとめた上で、実際の歴史的文脈にあてはめようと試みる。前述したように、キンキード・ウィークスはケンブリッジ版のテキストに年表を付し、ロレンスの歴史的関心を証明した。二次資料を駆使して、産業社会化・都市化による数々の変化、教育の普及、女性の開放、そして宗教の衰退などの社会変化の反映を小説に読みとろうとする彼の歴史批評家としての姿勢は、価値基準の明確なホルダネスのそれと比べて柔軟である。

第1章に関しては、キンキード・ウィークスは特に、ケンブリッジ版の冒頭より5ページ目から始まる第2セクションに注目し、その歴史性を疑似的だとして否定するホルダネスと意見を対立させる。このセクションは次のように始まる。

About 1840, a canal was constructed across the meadows of the Marsh Farm, connecting the newly opened collieries of the Erwash Valley. . . . The Brangwens received a fair sum of money from this trespass across their land. Then, short time afterwards, a

colliery was sunk on the other side of the canal, and in a while the Midland Railway came down the valley at the foot of the Ilkeston hill, and the invasion was complete. The town grew rapidly, the Brangwens were kept busy producing supplies, they became richer, they were almost tradesmen. (13)

キンキード・ウィークスがその実在を証明するものに、1796年に開通したノッティンガム運河、遅くとも1739年には作動を開始していたコッサル付近の鉱山、1840年開通のミッドランド州鉄道がある。これら全てがこの地域に、“extraordinary mining, industrial, trading and population expansion”をもたらしたというのである⁽³⁴⁾。当然、ブラングウェン一家もこの社会変化の影響を受け、それまでの田園的世界を脱して階級社会の仲間入りをする。キンキード・ウィークスが重要なテーマとする“movement into history”は回避されているどころか、すでに第1章においてみられると彼は力説するのである。

神話批評家によって原型の男女の対立を体現したものとみなされたウィルとアナのリンカーン大聖堂での口論に関しては、ホルダネスがその歴史的意義を追究しないのに対して、キンキード・ウィークスは、社会の産業化と教育界の革命の関連からその論を発展させる。彼は、この章が“how rational scepticism and scientific materialism not only bring about the decline of the church but also of religious sense itself”⁽³⁵⁾を象徴的に示したものであるとする。キンキード・ウィークスはその論のなかで詳説していないが、彼の方法論に従って当時の社会の動きを具体的に把握することによって彼の論を補足し、この口論の歴史的意義に対する理解を深めることができる。前述したようにこの出来事が1883年のことであることを考えると、大聖堂にたいする二人の意見の相違は、この時期に活発であったキリスト教信仰をめぐる歴史上重大な議論と重ね合わせることが可能となる。キリスト教の絶対・繁栄を信じるウィルと、それを不毛な過去の宗教だとして省みないアナ。折しもヴィクトリア時代の後半期は、西洋文明におけ

るキリスト教信仰の深刻な衰退期であった。産業化、都市化、教育の普及など社会の新しい動きが、絶対性・至高性を有するものとしてキリスト教観を修正しつつあったのである。この風潮は1859年のダーウィンの *On the Origin of Species by Means of Natural Selection* の出版（ロレンスは同書を1906年に読んだ⁽³⁶⁾）から本格的に始まったとみてよいだろう。キリスト教に代わる新しい信仰としての教育の向上の重要性を唱えたのは *Culture and Anarchy* (1869) を著したマシュー・アーノルドである。さらに、ロレンスも1907年までには通じていたフリードリッヒ・ニーチェの哲学⁽³⁷⁾、すなわち神の死という概念に基づいた哲学も、産業化・機械化という歴史的变化に直面する西洋の人々に訴える力を持ちつつあった。このような検証の結果、ウィルとアナの意見の不一致に19世紀に盛んであった宗教信仰をめぐる議論を重ねることで、小説は社会的・歴史的文脈のなかでとらえられる。それは同時に、神話批評に独占されていた小説の解釈の可能性を広げることでもあるといえよう。

同様に、アーシュラとスクレベンスキーの口論も歴史の流れに照らしてとらえることができる。議論のあった年代（1899年⁽³⁸⁾）を考えると、彼らのいう戦争はボーア戦争（1899—1902年）をさす。一方、ロレンスがこの小説を執筆中であった1914年には第一次大戦が勃発し、社会には新たな危機感とともに悲観的な雰囲気がただよっていた。そのような状況下でこの小説を書いたロレンスの態度を、ホルダネスは次のように批判する。“At precisely that moment, in 1914, when the tragic view of the society should have appeared with new urgency and insistence, Lawrence’s art denied and refused that recognition.”⁽³⁹⁾この口論に第一次大戦への直接の言及がないためにホルダネスのとらえ方は否定的であるが、視点を変えて次のように考えることも可能である。すなわち、ロレンスは、第一次大戦をボーア戦争に重ねることで、当時の支配階級の政策を盲信するスクレベンスキーが体現する全てのもの——国家主義、大戦、植民主義——への批判を、アーシュラの言葉に託して間接的に表明したのではないだろうか。もし彼が、当時のイギリス政府に不満を感じながらも自国で小説を出版し

たいと望むなら、何らかの妥協策を見出す必要があったはずである。結果的に *The Rainbow* は発禁処分の憂き目をみたが、それは大戦批判のためでなかった⁽⁴⁰⁾。小説に反映される歴史が一つではないように、その方法も多様であってよいのではないだろうか。

歴史批評家は、小説 *The Rainbow* を天才による偉大な作品として神話扱いせずに、特定の時代あるいはイデオロギーの産物とみなす。永遠・普遍性を賞賛する神話・非歴史的な読みへの攻撃の証に、作品の具体的な歴史的意義を追究しようと試みるのである。そのなかでもホルダネスは、小説中に矛盾を含む社会の全体像の直接の反映をみとめようとするあまり、それがみられないと作品自体に否定的になる。他方、キンキード・ウィークスは、二次資料を用いて作者ロレンスの歴史観の客観的な描写に努め、この小説のもつ歴史性を証明する。その読みは結果的に、歴史批評と神話批評の融合ともいうべきものとなったが、キンキード・ウィークスの批評姿勢は歴史批評にとって意義深い示唆をもつ。“It is no use ‘understanding’ history merely in terms of industrialisation, urbanisation, education, feminism ; nor even their economic or political causes. If that is all, we shall merely repeat the past.”⁽⁴¹⁾ *The Rainbow* は、歴史批評家のあいだでもその解釈が一致しないが、彼らが文学と歴史の関係に抱く関心・疑問は、神話批評家に比べてはるかに大きいということに異論はないだろう⁽⁴²⁾。

神話批評家と歴史批評家のみでなく、歴史批評家のあいだでさえも *The Rainbow* の読みをめぐるその意見が分かれる根本には、文学・歴史、そしてその両者の関係にたいしてのそれぞれの理解・信念が異なるという事実がある。簡潔にいうと、神話批評家は文学の自律的・特権的な地位の維持に努めるあまり、歴史を文学作品に追従的・付随的なものとしてその意味を限ろうとしている。彼らにとって、偉大な文学作品は比類なき才能と天才の想像力によって生み出されるものであり、文学の偉大さは歴史の流れに左右されるものではないのである。反対に、歴史批評家、特にホルダ

ネスは文学の自律性という概念にメスを入れ、社会的現実を反映するものとして文学を定義しなおす。彼はテキストにおける歴史の不在にたいして注意を払う必要を説くものの、社会のなかの矛盾・階級闘争といった彼自身の歴史の定義の枠にとらわれて、小説の外見上の神話の下に存在する歴史を見落としている⁽⁴³⁾。キンキード・ウィークスのとらえる歴史は、さまざまな社会の変化や現象から構成されており、ホルダネスの「歴史」のように狭い概念ではない。他の文学作品、そして文学以外の資料をも駆使して小説の「歴史化」を試みる彼の方法論には、今後の歴史批評の進展を促すものがあるといえるだろう。

歴史と文学の関係は、今日最も盛んに議論されている問題の一つでもある。*The Rainbow* の読みをめぐる決定的な解答はないが、より豊かで複雑な考察をそこから引き出すことは十分に可能である。依然として隆盛を極めるロレンス批評は、さまざまな研究法にたえうる彼の作品の奥深さを明らかにしている⁽⁴⁴⁾。 “[T]here can be no general solution to the question of the relations between literature and history because there is no general problem to be addressed.”⁽⁴⁵⁾ といって文学と歴史の区別を否定したのはトニー・ベネットである。「関係」の可能性／不可能性の追究は、今後の批評家に託された課題といえるだろう。

註

- (1) F. R. Leavis, *D. H. Lawrence : Novelist* (London : Chatto & Windus, 1955), p. 98.
- (2) 周知のように、リーヴィスは1948年に著した *The Great Tradition* のなかで、ロレンス以前の4人の小説家のみを「偉大な伝統」の継承者として擁護し、他の作家を省みなかった。*D. H. Lawrence : Novelist* は、*The Great Tradition* のいわば補足として出版されたものである。
- (3) Leavis, *The Common Pursuit* (1952 ; Harmondsworth : Penguin, 1993), p. 213. “By the critic of poetry I understand the complete reader : the ideal critic is the ideal reader. . . . Words in poetry invite us, not to “think about” and judge but to “feel into” or “become”—

—to realize a complex experience that is given in the words.”(pp. 212-13.)

- (4) Leavis, *D. H. Lawrence*, p. 105.

- (5) ロレンスは1929年に執筆したエッセイのなかで、産業機械化の結果、故郷の町イーストウッドの人々にも浸透した物質主義の弊害を嘆いている。“old wild England”は、彼の父親の世代には野性的な生命力の源として残っていたが、彼の代には消滅し、弱々しい男たちと所有欲の強い女たちを生み出したのである。

Lawrence, “Nottingham and Mining Countryside,” *Phoenix : The Posthumous Papers of D. H. Lawrence* ed. Edward D. MacDonald (London : Heinemann, 1936), pp. 128-40.

- (6) D. H. Lawrence, *The Rainbow*. ed. Mark Kinkad-Weekes (Cambridge : Cambridge University Press, 1989), p. 9.

以下、引用はこの版に基づくものとし、括弧内に頁数を示す。

- (7) Leavis, *D. H. Lawrence*, p. 98.

- (8) *Ibid.*, p. 99.

- (9) リーヴィスの言及する *Psychoanalysis and the Unconscious* (1921) は1919年12月から1920年1月にかけて、*Fantasia of the Unconscious* (1922) は1921年5月から6月にかけて執筆された。*The Rainbow* 執筆の時期(1913年8月から1915年3月)とこれらの年代の隔たりにたいする無頓着な態度は、小説に対するリーヴィスの「神話批評的」姿勢を示す一例といえるだろう。一方、グレスキが *The Rainbow* と並列するエッセイは、1914年執筆の“Study of Thomas Hardy”で小説執筆の時期と重なる。なお、ロレンスの作品の執筆年代については、次の資料を参照した。

Keith Sagar, “A chronology of Lawrence’s major works”, Keith Sagar ed., *A D. H. Lawrence Handbook* (Manchester : Manchester University Press, 1982), pp. 223-27.

- (10) Leavis, *D. H. Lawrence*, pp. 102-3.

- (11) *Ibid.*, p. 102.

- (12) H. M. Daleski, *The Forked Flame : A Study of D. H. Lawrence* (Madison, Wisconsin : University of Wisconsin Press, 1987), p. 74.

- (13) “...a character is judged not by social or ethical criteria but by the degree to which he is true to his deepest being, to the “carbon” of his nature. The conception of character as a series of ‘allotropic states’ is based, it seems to me, on profound psychological truth:...”
Ibid., p. 77.

- (14) Leavis, *D. H. Lawrence*, pp. 105-6.
- (15) "Chronology of *The Rainbow*," *The Rainbow*, p. 490.
- (16) Leavis, *D. H. Lawrence*, pp. 126-7.
- (17) Daleski, p. 103.
- (18) Leavis, *D. H. Lawrence*, p. 141.
- (19) Daleski, pp. 108-9.
- (20) Graham Holderness, *D. H. Lawrence ; History, Ideology and Fiction* (Dublin : Gill & Macmillan, 1982), p. 12.
- (21) *Ibid.*, p. 188.
- (22) Raymond Williams, *Culture and Society : 1780-1950* (1960 ; London : The Hogarth Press, 1993), pp. 199-215 ; Williams, *The English Novel from Dickens to Lawrence* (London : Chatto & Windus, 1970)
- (23) Holderness, p. 12.
- (24) *Ibid.*, p. 165.
- (25) *Ibid.*, p. 175.
- (26) ホルダネスは、自身の批評はいわゆる "vulgar Marxist" の批評と一線を画するものとし、著書のなかでもロレンスの小説の分析にはいる前に独立した章を設けて、彼の生育環境とその時代背景を「客観的に」考察している。しかし、拙論で焦点を当てるもう一人の歴史批評家、キンキード・ウィークスの批評と比較すると、ホルダネスの視点がより "vulgar Marxist" のそれに近いものであることは歴然としている。
- (27) Mark Kinkead-Weekes, "The Sense of History in *The Rainbow*", *D. H. Lawrence in the Modern World* eds. Peter Preston and Peter Hoare (London : Macmillan, 1989), p. 121.
- (28) *Ibid.*, p. 125.
- (29) *Ibid.*, p. 122.
- (30) *Ibid.*, p. 131.
- (31) Holderness, p. 178.
- (32) *Ibid.*, p. 186.
- (33) Kinkead-Weekes, p. 122.
- (34) *Ibid.*, p. 125.
- (35) *Ibid.*, p. 130.
- (36) Rose Marie Burwell, "A checklist of Lawrence's reading," Sagar ed., *A D. H. Lawrence Handbook*, p. 67.
- (37) *Ibid.*, p. 69.
- (38) *The Rainbow*, p. 491.
- (39) Holderness, p. 188.

- (40) *The Rainbow* は出版されて一カ月余り後の1915年11月に、わいせつのかどで発禁処分を受けた。アーシュラとその女性教師ウィニフレッドの関係が、同性愛を示唆するというのがその処分の理由であった。
- (41) Kinkead-Weekes, p. 133.
- (42) ここで、幅広い文学の批評家でもあったロレンス自身の批評観を知るのも興味深いことであろう。晩年の1927年2月に書かれた“John Galsworthy”というエッセイの冒頭で、彼は次のように述べているが、批評家としての自身の姿勢を明確に示している貴重な資料である。“Literary criticism can be no more than a reasoned account of the feeling produced upon the critic by the book he is criticizing. Criticism can never be a science: it is, in the first place, much too personal, and in the second, it is concerned with values that science ignores. . . . We judge a work of art by its effect on our sincere and vital emotion, and nothing else. All the critical twiddle-twaddle about style and form, all this pseudo-scientific classifying and analysing of books in an imitation-botanical fashion, is mere impertinence and mostly dull jargon.” Lawrence, *Phoenix*, p. 539.
- そのなかに“life”が躍動しているか否かで文学作品にたいする評価を決定する彼の批評精神は、“life”という概念をその道德の根幹において作品に求めるリーヴィスの批評姿勢に通じるだろう。
- (43) 歴史批評家が作品分析の際にテキストの表面から排除されているもの、すなわちピエール・マシェリーという歴史に注目するのは知られていることだが、ホルダネスは同時に、テキストに書かれてあることにも注意を向ける必要を主張している。
- Cf. Pierre Macherey, *A Theory of Literary Production* (1978; London: Routledge, 1992)
- (44) 近年は特に、次に挙げるような複数の論文を編集した批評集の出版も相次いでおり、それぞれに興味深い問題を追究している。
- Christopher Heywood, ed., *D. H. Lawrence: New Studies* (London: Macmillan, 1987); Keith Brown, ed., *Rethinking Lawrence* (Milton Keynes: Open University Press, 1990); Michael Squires and Keith Cushman, eds., *The Challenge of D. H. Lawrence* (Madison, Wisconsin: University of Wisconsin Press, 1990); Peter Widdowson, ed., *D. H. Lawrence* (London: Longman, 1992)
- (45) Tony Bennett, *Outside Literature* (London: Routledge, 1990), p. 45.